

漢法苞徳塾資料	No. 185
区分	資料・刺絡
タイトル	内経刺絡類編 … (安徽中医学院) 喻喜春・著
著者	八木素萌
作成日	1990.02

古代でも近代にあっても、絡脈の変化を観察することを診断の方法の一つにしている。絡診は単独に用いたり、他の診察法と総合するやり方で診断が出来る。その為には先ず正常な絡脈の状態について知っていないてはならない。

◎正常な絡脈について

◇原文……『素問』経絡論第 57

「陰絡ノ色ハ其ノ経ニ応ジ 陽絡ノ色ハ変ワリテ常アルコト無ク 四時ニ随ヒテ行グルナリ 寒多キトキハ凝泣ス 凝泣スルトキハ青黒 熱多キトキハ淖澤 淖澤ナルトキハ黄赤 此レ皆常色ナリ 之レヲ無病ト謂ウ」

◇語訳

陰絡の色は其の経脈に〈*・経脈の五行性の色〉相応し、陽絡の色は変化して常〈*・常色〉であることは無い、四時の転変に随って変化するからである。〈*たとえば〉秋冬には寒いことが多いので、〈*その寒さの為に〉血気の運行は遅滞する、〈*それで〉青黒い色が現われる。春夏には熱いことが多いので血行は滑らかとなる、〈*それで〉黄赤色が現われる。このような状態は無病の正常な色の状態である。

◇注

陰絡とは深部の絡脈を指し、陽絡とは浅在的な絡脈のことである、陰絡は内部にあって経脈に近いので色はそれ〈*陰経の常色〉に相応している。

◇臨床所見

絡診は一つの極めて有用な診察〈*診断〉方法である、陽絡は体表〈*の部位〉に浮いているから外気の〈*気候変化の〉影響を大きく受けるが、舌下の絡脈は内に在るものが外に〈*表出〉現われたもので、口の中にあるから〈*外界の気候変化の影響では〉余り変わらず、ただ、発熱・脱水・水腫などに関係する〈*症状によって変化する〉。高熱の時には血流が早くなるのでその色〈*舌下絡脈の色は〉は「淡」〈*淡色の意味に解釈できない、本来の色が鮮明に出ると言う意味であろう〉になる、脱水の時には細くなって「深い色」になる、水腫の時には脈が充満し淤滞するので極度に怒張する。舌下の絡脈の充実と虚衰は、体液の多少、津液の保存とか耗損とかを知ることが出来るものである。

◎絡診の原理について

◇原文……『素問』皮部論第 56

「邪ノ始メテ皮ニ入ルヤ 沂然ト毫毛起コリ腠理開ク 其ノ絡ニ入レバ絡脈盛シ色変ズ」

◇語訳

病邪が皮膚より侵入し始めると、悪寒して毫毛が起ち腠理は開いて発汗〈*泄〉する、絡脈に入ると絡脈は盛満となって色が変化する。

◎絡診の方法について

「内経」に述べている〈*在る〉絡診の方法は三種類に〈*分類して〉要約できる。

(A) ただ絡脈の色を観察して診断の根拠にする。〈*方法である〉

〈a〉青色

(原文)『靈枢』経脈第 10

「凡ソ絡脈ノ診ハ 脈色青ナレバ寒カツ痛ナリ」

(語訳) 絡脈を診察して病変を知る〈*ことが出来る〉方法は、例えば脈〈色〉が青色になっていれば、寒邪が気血を凝渋〈*凝滞〉させて、〈*その為に〉血行不良になった痛の病症とする。

(原文)『靈枢』経脈第 10

「胃中寒エレバ 手魚ノ絡多クハ青」

(語訳) 胃中に寒えがあるような時には手の魚部の絡脈に多くは青色が現われる。

(原文)『素問』皮部論第 56

「陽明ノ陽 名ビテ害ト曰フ 上下法ヲ同ジクス 其ノ部中ニ浮絡有ルヲ 視ルハ皆陽明ノ絡ナリ 其ノ色多ク青キトキハ痛アリ」

(語訳) 陽明経の陽絡を害^ひと言ひ、手足ともこれは同じである、この上下の部分に見える浮絡は、皆陽明の絡脈であるが、この浮絡に青色が多く見えるときは痛みを病んでいるのである。

(臨床所見)

手の魚際^いの部に青色が現われるのは胃中に寒えがある、また痛みがあるときには多くは足の陽明経上に小絡が現われる、これは青色の絡脈として顕現する。

〈b〉赤色

(原文)『靈枢』経脈第 10

「赤ナルトキハ熱アリ」

(語訳) 絡脈が赤色のときには病は熱である。

(原文)『素問』皮部論第 56

「黄赤ナレバ熱ナリ」

(語訳) 絡脈が黄赤色であれば病は熱である。

(臨床所見)

一般的に見受けられる赤色あるいは黄赤色の絡脈は、多くは浅在性の微細な動脈絡である、これはやや太い動脈の畸形的な支脈であったり、炎症を起こしているリンパ管である。発熱の際には絡脈の管腔は充満し血流も早くなるので、絡脈は一層明らさまに現われるのである。従って前述のような動脈絡の色は皆熱病の象徴で、大部分の病人に見られるものである。この他に肺熱の場合には酒皸しゅきの鼻<*酒やけした鼻>のようになるが、その部分の皮膚における絡脈の発赤である。また「肝陽上亢」や肝・胆の熱が甚だしい時には、耳後に小さい紅色の絡がハッキリとあらわれる、また足陽明経に熱があれば顴部(*コメカミ)の絡が時に赤色になる。

<c> 黒色

(原文)『靈枢』経脈第 10

「其ノ暴カニ黒キモノハ久痺ノ留ナリ」

(語訳) 絡脈に突然に黒色が出現するのは、已に久しく患っている痺証の留滞を示している。

(原文)『靈枢』論疾診尺第 74

「多黒ハ久痺ト為ス」

(語訳) 久痺の患者の絡脈は、多くは黒色である。

<d> 白色

(原文)『素問』皮部論第 56

「多白ナレバ寒ナリ」

(語訳) 絡脈が白色を呈するのは寒えによる病である。

<e> 青黒赤色

(原文)『靈枢』経脈第 10

「其レ赤有リ 黒有リ 青有ルハ 寒熱ノ気ナリ」

(語訳) 絡脈上に赤や黒や青など各種の色沢が混じりあうように出現する如きものは、寒と熱とが相互に往来する<*寒熱が>「相兼的」な病証である。

(原文)『靈枢』論疾診尺第 74

「血脈ヲ診スル者〜多赤 多黒 多青 皆見ワルル者ハ 寒熱ナリ」

(語訳) 血脈の部位を診察して、若し多赤・多黒・多青の三色が皆見われているならばこれは寒熱相兼している病である。

〈f〉五色が皆見われる

(原文)『素問』皮部論第 56

「陽明ノ陽ヲ名^レンデ害ト曰ウ〜五色皆見ワルルトキハ寒熱ナリ」(語訳) 陽明経の陽絡は害^イと言う〜もし五種類の色が皆見われるのは寒熱相兼の病である。

(B) 絡脈の望診は切診と結合させ (*て診断を進め) る

(原文)『靈樞』周痺第 27

「故ニ痺ヲ刺スモノハ 必ズ先ニ其ノ下ノ六経ヲ切循シテ ソノ虚実及ビ大絡ノ血結ボレテ通ジザルモノ 及ビ虚シテ脈ノ陷空ナル者ヲ視テ 之レヲ調ノウ 熨シテ之レヲ通ジ 其ノ癥堅ノモノハ転引シテ之レヲ行ラス」

(語訳)

故に痺病に刺鍼する際の原則は、必ず足の六経を按切して 六経の虚しているものや実している所を観察する、これは大絡での血の鬱結している所や、虚している為に経脈の陥没している所にも及ぶが、その虚実に従って或は補したり或は瀉したりして調整するのである、これには熨灸による気血の疎通法や、こわ張っているものは牽引法による調通法 (*調整して疎通させる) などとも併用することも良い。

(臨床所見)

臨床においては、絡脈の望診の他に、絡脈自身や経脈や気口やを切診して、総合し分析した上で、病症の虚実を確定する。例えばショック状態にある患者では、時には絡脈はスッキリ (*清せき) としているが (*問題が無い様に見えるが)、気口の脈拍では微弱で糸の様に (*様な脈に細く) なっている (*ものである)、このような時には積極的に救急措置を進める必要がある。またコメカミの浅動脈の血管炎や閉塞性血管炎などの時は、動脈脈管が狭窄したり全面的に閉塞したりするが、この状態に伴って静脈絡も炎症を起こしたり怒張したりする、これは脈管の管腔が閉塞を起こしているためである、これを摸ぐると硬くなっていたり、時には結節状になっていたりである、これは刺しても出血しない。近代では注射した薬による静脈炎に因るものがある、これは脈管々腔の閉塞の為に出現する索状のものである、これらの絡の部位を刺すのは (*皆) 宜しくない、刺絡が必要な場合には、その局所の絡の近くの柔軟 (*虚軟?) の部位の弾力のある絡を選択して、(*そこを) 刺して治療効果を局所に及ぼせるのである、(*刺絡部位を) それを選択する時には、絡の遠位端を圧迫するとその近位端が扁平に陥下し色沢が悪く変化すれば、それは血流のある箇所である事を示しているから、適宜に刺すのである。

(C) ある部位の絡脈の色で疾病の診断が出来る

(原文)『靈樞』論疾診尺第 74

「嬰兒病〜〜耳間ニ青脈起コル者ハ掣痛ナリ」

(語訳)

嬰兒が病んでいる時に、もし耳間に青い脈の隆起がみられれば、身体或は手足の筋肉に牽引掣痛がある事を主っている。

(臨床所見)

臨床的には発育の良い嬰兒の耳間に青脈がかすかに現われているものである、しかし、栄養不良で脱水状態にある嬰兒や、結核性脳膜炎の患者や、長期間下痢が続いている者は、脂肪が消耗しているため青脈は顕著になる、これは栄養不良である事の証左である。

(原文)『靈枢』論疾診尺第 74

「魚上ノ白肉ニ青キ血脈有ル者ハ 胃中ニ寒エ有リ」

(語訳)

手の魚際の際の白肉の際に青色の脈絡が現われるのは、胃中に寒えが有る事を示している (*主っている)。

(D) 絡脈によって虚実を弁別する

(原文)『靈枢』経脈第 10

「凡ソ此ノ十五絡脈ハ 実スレバ必ズ見ワレ 虚スレバ必ズ下ル〜
人ノ経同ジ一カラス 絡脈ノ別ルル所異ナルナリ」

(語訳)

前に在り (*原著の P4 ~ 5)

(臨床所見)

絡診と言うものは中西医の重要な診断方法の一つであって、臨床の多くの場合に用いることが出来るものである。(*例えば) 静脈炎の時には絡脈は硬くなって痛みがある、急性淋巴管炎の時には腫脹した淋巴管は紅く熱を帯びて硬化して痛む、一酸化炭素中毒では絡脈は紅い粉白粉の様な色になる、末梢循環の衰えでは絡脈は淤み滞ったり陥凹したりする、肝硬変の時には絡脈の変化は、紅色を帯びた樹枝状瘻のようなもの、網細血管の拡張した朱色の掌、腹壁の絡脈の怒張、舌下静脈の淤んだ怒張曲折などとなり、妊娠後期には下肢静脈或は表在微細動脈が怒張する、骨盤内の腫瘍もまた腸骨静脈或は骨盤下部静脈を圧迫するので、片側の下肢静脈が曲折怒張する、雷納徳氏病 (*レイノー病) では四肢端の絡脈は青紫になり、紅斑性の肢痛症では肢端の絡脈は鮮紅色になる、皮膚炎の四肢絡脈は対称的に萎縮する。以上によっても、絡診は臨床的に非常に重要な診断方法の一つである事が判かる。